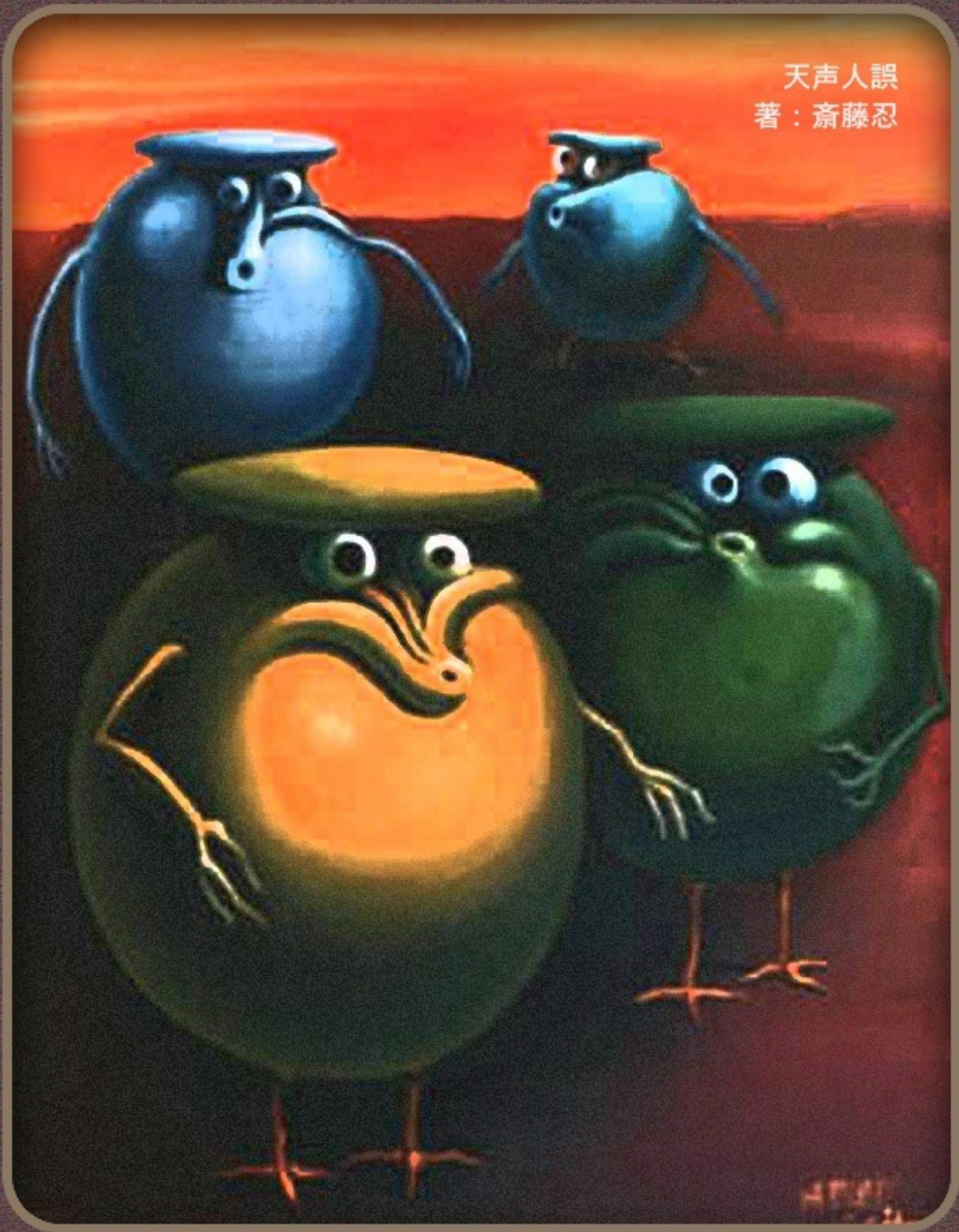


# 天声入誤

天声人誤  
著：齋藤忍



# 痰

---

痰には良い痰と悪い痰がある。悪い痰は吐いたとき路面でアメーバ上に広がる涎分の多い純度の低い痰である。良い痰は雨に濡れたプラットフォームにできた極めて浅い水たまりの上に吐くと、ワーンバン、ツーバンと素早くバウンドしてスリーバウンド目で水たまり表面に着水し、ハイドロプレーン現象により7cmほど水面を滑らかに移動した後、厳かに停止する。停止した後も自らの表面張力によりプルルッと微かに震えるのを見逃してはいけない。

外観上で良い痰であるかどうかを見極めるには、その色調がモスグリーン又は象牙色で、クリーム色又はベージュ部分が全体の1/3以下であり、グリーン系からクリーム系への変化がよりスムーズなグラデーションであることが重要なポイントとなる。またそこに一筋の血痕が走っていればベストである（この血痕はあまり数が多いと病的な印象が強くなるので好ましくない）。

色調の次に大切なのがその表面の弾性である。軽く摘んで持ち上げた時に型くずれしないことが良い痰の条件となる。爪楊枝の尻で表面を軽く押しても弾けない程度の弾性は必要である。

重さは2.5gが基準で±0.8gが許容範囲とされているが、実際には4gを超えるものでも立派な痰を見かける事もある。ただし4gを超えるものでは上記の、"軽く摘んで持ち上げた時に型くずれしない"という条件を満たすものは少ないようだ。

弾性を計測するためには鋭い刃物で中央から切断するという方法もある。この時に切断面が流れ出てしまうようでは良い痰とは言えない。切断面は多少の膨張はあるものの、その垂直性を保とうとする努力が要求される。

次に味だが、悪い痰はカスタードクリームに近く、良い痰は生牡蠣に似ており新鮮なものほど香ばしく、時間が経つと甘味が増す。地方によっては天日干しにして甘味の増したものを炊き込み御飯にして食する。

また寒冷地では夏場に採取した良い痰を塩漬けにして、冬場の貴重な蛋白源としている。痰はもともとが痰であるため、日数をおいても腐食したり病原菌が増殖する心配が少なく、白血球の殺菌効果も残留していることから、近年健康保存食品としての需要が増加している。

## 千枚通し

---

千枚通しを電話帳の上に立て、思いきり力を入れて突き刺してみる。どのくらい貫通した確かめてみると32枚であった。千枚通しとは嘘八百の、正式には32枚通しである。千枚通すにはこの千枚通しなるものをボール盤の先に括り付け、丹念に加工を施せば可能であるかもしれない。しかしそうであるならば、ただの釘でも千枚通しと呼ばれる権利がある。

万年筆というのはいつ発明されたのだろうか？仮に人類文明発祥紀元前1万5000年が正しかったとしても、文明ができてすぐに万年筆はできないので、1年以上使用されたという万年筆はまだ実在していないものと思われる。だから万年筆が実際に万年間の使用に耐えうるものかどうかは実証されていない。

万年平社員という人がいる。イズミシゲチヨさんの100倍生きる人である。きっとこういう人の為に万年筆と1万年使える布団（万年床）があるのだろう。

万が一という言葉がある。保険会社がよく使うが、日常の会話、特に会社の会議などでもよく使われる。しかしたいていの場合、その実際の確率というのは百が一、十が一ぐらいのことが多い。

ひどい時には9割がたダメだとわかっているのに、「万が一ダメだったら..」などと言うヤツもいる。これに比べ、自動車保険の万が一は当たらずとも遠からずだ。日本では1年間に約5000人が交通事故で死亡する。おおよそ2万人に1人の確率である。

万力というすごい装置がある。恐らく百人力の人が百人集まったぐらいのすごい力のある装置なのだが、万の単位については、未だ明らかにされていないようである。

百貨店という店がある。ずいぶんと品数の少なさそうな店だ。百貫デブという人がいる。375kgに相当し、かなり大袈裟な表現のつもりで作られた言葉であると思われるが、マクガイアー兄弟や、太り過ぎて家から出られなくなったアメリカ人をみると、まんざらでもない。

酒は百薬の長であり、100回飲むことで万病が治るとされているが本当だろうか？

## 豊登とバーンガニア

---

リング中央でバーンガニアのスリーパーホールドが決まった。意識が薄れていく中、豊登は思った。

「おい！打ち合わせと違うだろ！」しかしこのままでは本当に意識を失ってしまいそうだ。

仕方なく豊登は言った。

「ま、まいった！」

するとバーンガニアのスリーパーホールドが急に緩くなり、豊登はバーンガニアの両手を振りほどき反撃に出た。

幸い豊登の「まいった！」は声が小さくレフェリーには聞こえていなかった。

試合後豊登はバーンガニアに言った。

「おい！もっと手加減してくれよ。打ち合わせと違うじゃないか！」

これを聞いたバーンガニアが言った。

「なに言ってんだ！オマエこそmy turnが多過ぎるぞ！」

童謡の歌詞の中には実に不思議なものが多い。もの心ついたときから半ばマインドコントロールで記憶させられているため気が付かないのだが、あらためてその意味を考えつつ復唱してみると色々と奇妙な点に気付くはずである。

例えば、夕焼けこやけの「こやけ」とか、仲良しこよしの「こよし」とは一体何なんだろうか？夕焼けは夕日で空や雲が赤く染まった景色であるが、「こやけ」というのは何処か夕焼けの他に焼けている部分があるのだろうか？

「こやけ」というからにはそう大きく焼けている訳ではなさそうなのだが。「こよし」のほうは想像するに仲良しほど仲がいいわけではないが、きらいとかウマが合わないというほどでもない友人を意味するのであろう。

「くつがなる」というのがある。「靴が鳴る」と書いてよいのだろうか？なぜ靴が鳴るのだろうか？今どきのエアーマックスを履いた小学生が野道のアンツーカーよりかは柔らかいと思われる地面の上を歩いた場合音の出る要因は考えづらい。

昔の小学生であったとしてもピーピーサンダルでもない限り特に音は出ないのではないか。しかも全員が手をつないで歌を唄っていても聞こえるほどの大音量で靴が鳴るのである。

さっちゃんの本名は「さちこ」で恐らく「幸子」と書くのだろう。両親が不幸で貧困に喘いでいる家庭ではこの子は幸せになるようにと願い「幸子」と命名する場合が多く、それゆえバナナを一度に一本たべてしまうことは許されず、また借金の返済に追われ一所に定住できずに近所の人々が「ほんとかな？」と思っているあいだに一家揃って夜逃げをするのである。

後にさっちゃんが大人になったときに作られた歌が「赤色エレジー」である。

どんぐりはお池に「はまった」とのことであるが、相当にでっかいどんぐりであった。池のほうもどんぐりの半径以上の深さが必要とされる。

うみにおふねをうかばして、行ってみたいなよそのくに。行ってみたいのはいいけれど海外に行くにはそれなりの手続きがいる。そのことも説明しないと。

おおきなくりの木の下で、なぜ「くり」なのか。春にはおぞましい臭気を放つ花粉に耐えなければいけない。夏には栗の木につく害虫に気をつけなければいけない。特にイラガの幼虫などは触ったら最後、とても仲良く遊んでなどいられない。

秋にはもちろん栗のイガが地面に落ちているし、運が悪ければ落下してくるイガが脳天を直撃することもある。大きな木の下で遊ぶのであれば「くり」は避けたほうがよいと思うのだが。

いぬのおまわりさんは「いぬ」であるが、いぬの訓練士は「人間」である。この歌がなければいぬのおまわりさんって警察犬のことかな？とか、警察のイヌドモが！と思う人もいるのでは？いずれにしても迷い猫の処理を犬に任せても埒が明かない。

埒が明かないといえは読まずに手紙を食べあうヤギさんたちであろう。こういう人（ヤギ）こそもっとE-mailを有効に使うべきである。

「おはながわらった」というのがある。知らない人もいると思うので歌詞を全部紹介すると「おはながわらった（これを4回繰り返す）みんなわらった いちどにわらった」これが一番、二番は最後の「いちどに」を「げんきに」に差し替えるだけ。シュールな歌である。

こわいの極め付けはやはり「あかいくつ」であろう。何がこわいかといえはいきなりマイナー調で始まること、異人さんが正体不明であること、ちゃんとした理由も説明されないまま連れて行かれちゃうことである。

そしてその一連のストーリーの中で赤い靴という小道具的な部分がクローズアップされ象徴的に描かれていることでさらに怖さを増している。

横浜の波止場という固有名詞が唐突に出てくるのも不思議である。なぜ横浜なのか？長崎であった場合神戸に着いてしまうかもしれないからか？異人さんはナニ人なんだろう？なんとなくオランダ人のような気もするがモロッコ人とかコロンビア人であったらもっとこわいし旧共産圏だとしたらさらに怖い。

想像するにタイガーマスクのミスターXみたいな服装をしているのだ。そして虎の穴に連れて行かれ覆面女子プロレスラーにされてしまうのだ。やはり思った通り人身売買だ。

そして赤い靴の女の子の見返りとして日本の港にやってきたのが青い目をしたお人形である。ここでは何処の港に着いたのかは謳っていない。

アメリカ製のセルロイドであるため焼却処分する際に有毒ガスが発生するため環境保護団体の抗議行動を恐れ、停泊する港がどこであるか公開しなかったのだろう。さらにこの人形は青い目から涙を流すという怨念が宿ったものである。きっと髪の毛も伸びるに違いない。

いろいろとイチャモンをつけてきたが童謡全体に言えることは今の時代には当てはまらないものが何の修正もされずにそのまま歌いつがれているということだ。もちろん著作権は尊重しなければならないが子供を時代錯誤させるのもどうかと思う。

上記でも分かるとおり外国に行くといえば必ず船というこになっているし、例えば「たきび」という歌ではたき火自体を奨励している。いまどきたとえ自分の土地の中であっても苦情なしでのたき火はむずかしい。

「おもちゃのチャチャチャ」では鉛の兵隊がトテチテタしたりするが鉛は有毒物質であるし、だいたいいまの子供のおもちゃといえばもっぱらゲームソフトでである。

「おはなしゆびさん」という歌では、「このゆびパパ ふとっちょパパ」ではじまりこのパパは「やあやあやあやあワハハハハハハ」とおはなしをする。そして「ママ」は「まあまあまああホホホホホホホ」、「にいさん」は「オスオスオスオスへへへへへへへ」、「ねえさん」は「アラアラアラアラウフフフフフ」となっている。

さいわい人間の指の数には限りがあるが、仮に「じいさん」ゆびは「ゲホゲホゲホゲホアグググググ」、「ばあさん」ゆびは「ヒホヒホヒホヒホナンマイダ～ナンマイダ～」になったのだろう。

。

## 宇宙人

---

金星人ではないかと思われるようなジイさんとか、土星人だろ！という感じのオバさんとをたまに見かけるが大抵の場合彼等は地球人である。

では本当に宇宙人はいるのか？ということになるのだが、いる、いない、の前に、仮にいたとしても地球人が遭遇できる確率は極めて低いということを理解しておかなければいけない。

地球が誕生したのは47億年前であり、人類が誕生して10万年。そしてその人類が文字や絵によって見たものや聞いた事を記録に残し、後世に伝えられるようになってからは、せいぜい5千年。大気圏外の宇宙に出る手段を開発してから50年程度である。

人類が生存している期間が10万年の場合、それは地球の歴史の中の約1/5000だ。つまり宇宙人が地球にやってきたとしても5000回来ないと地球人に会えないという計算だ。さらに文明を持った地球人に会える確率は1/100000となる。

仮に地球と同じような惑星が存在し、そこに人類と同じような高等生物がいたとしても、同時期に存在できる確率は1/5000の2乗となり、お互いが宇宙空間内で遭遇できる確率は1/10000000の2乗となる。宇宙の誕生が137億年前とすれば、その中の47億年という期間も考慮する必要があり、さらに確率は低くなる。

ということで、時間軸で考えた場合には確率的には限りなくゼロに等しい。仮に地球人がこれから先高度な文明を維持しながら100万年生存し続けたとしても確率的には焼け石に水であろう。

時間軸で考えた場合には別の問題もある。地球は24時間で自転しているわけだが、人類はこの24時間を基準にして生活パターンや行動する速度が自然に決まってきたはず。しかし他の惑星の自転速度が同じである可能性は少ない。

仮に48時間で自転する惑星の宇宙人は地球人より動きが倍遅くなる。歩く速度も喋る速度も倍かかるわけだ。子供でもボブサップのような低い声で笑うのだ。このテンポに合わせて平和条約交渉とかしなければいけない。寝てるのかと思ったら瞬きだったなんてこともあるだろう。

逆に2時間で自転する惑星の宇宙人は非常に忙しい。12倍の速度で行動されたら、とてもついてはいけないだろう。寿命も4~5年程度かもしれない。

問題は時間だけではない。「大きさ」というのもある。宇宙人の生息する惑星が地球と同じサイズである可能性は低い。そしてそのサイズによって重力が異なるわけで、仮に水星程度の惑星か



ら来た宇宙人は地球上の重力に耐えられなくて立ってはいられないだろう。

生体によっては自らの重さで潰れてしまう可能性もある。反対に土星クラスの惑星から来た宇宙人は、おそらくその惑星の重力に耐え得るためにゾウとかカメのような体型をしているだろう。極端な場合はアワビのようにになっているかもしれない。

以上のような、時間、サイズは、あくまでも地球という惑星を基準とした考え方の範疇ではあるのだが、宇宙というところは天文学的数値に匹敵するほど広く、中には我々の尺度では考えられない惑星もあるかもしれない。

自転速度が0.5秒とか、サイズが地球儀ぐらいの惑星で生命が誕生しているのかもしれない。もしかしたらそういった惑星から来た宇宙人は既に地球に何度もやってきてはいるのだが、我々が気付いていないだけなのかもしれない。超高速で動いている極小の体を持つ彼等にとっては、我々人類は地殻変動並みの超低速でしか動く事のできない超巨大物体にしか写っていないのかもしれない。

では、そのような超小型の惑星で生命は誕生するのか？一般的には水が存在しないと生命の誕生は困難とされている。地球ほどの大きさがないと重力で表面に水を貯えておくことは出来ないとも言われている。しかし我々生物が生命を維持するために必要な酸素は、もともと猛毒物質でもある。猛毒ではあるのだが、その酸素が大量にあったがために、それを利用して生きる生命が自然と発生したわけだ。

仮に酸素が無いとしたら、水素を吸って生きる生命が誕生したかもしれないし、ヘリウムを吸って生きる生命であるかもしれない（声はかん高くなるかもしれないが）。また、場合によってはセシウム-137を吸う事で生命を維持する生き物になる可能性もある。ガミラス星人とかがそうだ。放射能の中で進化してきたにもかかわらず顔色が悪い点を除いてはほぼ人類と同じ体型をしている。進化の力とは恐ろしいものである。

もう一つ、忘れてはいけないのが距離である。生命が生息する可能性がある惑星には必ず地球の太陽に当たる「恒星」が存在しなければならない。しかしその恒星、地球から最も近いケンタウルス座のプロキシマ・ケンタウリでも地球からの距離は4.22光年だ。現在のスペースシャトルでは16万年かかる距離にある。しかもこの恒星が地球と同じような惑星を持っているという説は無い。

近年の観測で、地球と同等の惑星の存在も明らかになっている。グリーゼ876d、OGLE-2005-BLG-390Lbなどだが、グリーゼ876dは地球から15光年離れたところにあり、スペースシャトルでは57万年かかる。OGLE-2005-BLG-390Lbに至っては2万光年先あり、スペースシャトルでは7

億6000万年かかる。

しかもグリーゼ876dは恒星の至近距離をわずか2日足らずで公転し、表面温度は数百℃に達することから生命が存在する可能性は極めて少ないとされている。OGLE-2005-BLG-390Lbのほうは逆に表面温度は - 220℃と考えられている。この温度では水、アンモニア、メタン、窒素などはすべて凍ってしまい、こちらも生命の存在は期待できない。

仮に光速に限りなく近い速度で移動できる宇宙船が開発されたとしよう。それでもOGLE-2005-BLG-390Lbまでは2万年以上かかるのだ。また仮に生命が存在する惑星があったとしても、その惑星までの距離は光の速度で数万年以上を覚悟しておかなければいけないだろう。

いずれにしても人類が宇宙人に遭遇できる可能性などというものは皆無と言ってもいいだろう。ただし「ワープ」などというものが実現すれば一気に真実味が増して来るというのも事実だ。

しかしワープを肯定するということは相対性理論を覆すということにもなってしまう。というか現実的には「あり得ない」ことであろう。しかし、その昔、人間が鉄でできた乗り物に乗って空を飛ぶなんてあり得ないと多くの人が思っていたはずである。もしかしたらあり得るかもしれない。いや、やはりあり得ないだろう。

※2012年現在、上記よりも多くの地球型惑星が発見されている。

## 視野

---

肉食の動物は、捕えようとする目標を正確な距離で見定めるために顔の正面に2つの目が位置している。これに対して肉食動物の餌となる生き物、つまり草食動物は常に周囲が見渡せるように顔の側面に目が位置している。

肉食動物の中でも、ライオン、狼、フクロウ、アザラシ等は、その顔つきから想像するに、恐らく人間と同じような視野を持っているのではないか。しかし草食の、鹿、馬、象などの視野というのはどうも想像しづらい。

例えばサラブレッドの場合、となりを走っている馬の状況は大変よくわかり、反対側の馬の様子も騎手の表情まで完全に捕えることができるように思われるが、はたして真正面の景色というのはちゃんと見えているのだろうか？

馬の目の位置を考えると、どうも視野の中央付近はピンボケになっているように思える。しかしそのわりにはゴールに向かって一直線に走っていけるのはなぜだろうか？

象などはもっとピンボケになっているはずである。人間でいえば耳の下のやや前方付近に目が位置しているということになる。

鯨はどうだろうか？ピンボケどころではない。特にマッコウクジラなんかは完全に左右の視野が独立している。映画館に例えれば、スクリーンに何も映っていない真っ暗な状態で、左右の壁面前方の、「非常口」、もしくは「禁煙」のサインの付近に40インチぐらいの画面がそれぞれあって、マッコウクジラはこの画面を見ながら泳いでいるのだ。

しかしこれでは真っ暗な部分が多すぎるので、この黒い所は自動的にカットされ、脳に伝えられるのは2つの画面だけのはずである。それでは左右2つの画面の繋ぎ目はどうなっているのか、この2つの画面は全く違った風景が映っているはずである。

カメレオンはどうだろうか、これも仮に目が1つであれば何も問題はないのだが、2つの異なった画像データを脳の中でどうやって処理をしているのだ？やはり問題は繋ぎ目である。

蟹の場合はどうだろうか、こいつはもともと顔から直接手足がはえたような変な生き物であるうえ、2つの目玉が各々360度見渡せるようになっている。つまり左目で右目をみることができ、1匹なのに目と目が合って気まずい思いをしたりもする。

磯辺でじっとしたまま赤くなっている蟹を見かけたら、「ああ、気まずい思いをしているん

だな、」って思っで見過ごしてやってほしい。

そもそも人間の視野にしてもその輪郭というものは定かではない。はっきりとしたアウトラインがあるわけでもなく、グラデーションでボケていつてゐるのでもない。その輪郭の"かたち"にしても長方形なのか楕円形なのか $\infty$ （インフィニティー、8の字etc..）なのかはよくわからない。

輪郭の方を見ようとすると、いま輪郭であったと思われるあたりが視野の中央になってしまい、いくらトライしてもその輪郭に焦点を合わせることはできない。そんなことをいつまでもやっていると、いつか白い2つの歯車が視野の上の方に現われて、消えなくなってしまう。

これは虹彩のアイリスと水晶体のフォーカスをコントロールするモーターのシャフトの根元のジュラコン（プラスチックの一種でナイロンのような材質）の歯車がCCD付近の外壁に接触し、この外壁が摩耗し穴が開き、歯車がCCDの視野範囲内に脱落したために起こる病気であり、見ないようにすればするほど、このシャフトが激しく回転するため、余計に病状を悪化させてしまうというタチの悪いものである。そうならないように気を付けよう。

## ワンボックス

---

自動車に関連する言葉は日本語と英語とではかなり異なっていて、"ハンドル"は英語で"STEERING","HANDLE"と言っても自動車のハンドルをイメージできる外人は少ないはずである。

"アクセル"は"ACCELERATOR"の短縮とすれば、まあまあである。"ウインカー"は英語で"BLINKER",この"WINKER"という表現は外人にも評判がいいらしい。

その他"フロントガラス"は"WINDSHIELD","バックミラー"は"BACK VIEW MIRROR"など、全く違うものや、何となく似ているものなど、色々がある。

また、英語と米語のあいだでも異なった表現の言葉が多く、米語の"TRUCK"は英語で"LORRY","STATION WAGON"は"VAN","SEDAN"は"SALOON"になり、さらに日本英語の"RECREATIONAL VEHICLE"とか"ONE-BOX CAR"なんかが混ざってくると、もう訳がわからなくなる。

米語の"MINI VAN"が、どうも"ONE-BOX CAR"に相当するらしいのだが、広島に本社がある"マツダ"でも、この"ONE-BOX CAR"という呼び方をしているのだろうか。

仮に"ENOLA GAY"などという呼び名を自動車に付けたとしたら、各方面から猛烈な抗議を受けるはずである。

長崎に原爆を投下したB-29は※"BOCKSCAR"（ボックスカー）という愛称だったはずである。

※当初ボックスカーを"BOXCAR"と記載しておりましたが、これは搭乗員のFrederick Carl Bock大尉の名前が由来の"BOCKSCAR"であるとのこと指摘をいただき訂正いたしました。

## 飛ぶ

---

鉄腕アトムも鉄人28号もマジンガーZもガンダムもエヴァンゲリオンも実際に作ったとしても絶対に空を飛ぶことはできない。揚力がないからだ。飛行機も鳥も本体に対してかなり大きな翼があるわけで、これは重量が増えれば増える程重量に対する翼面積の割合も大きくなるのだ。

だからハエはあの体でもあの程度の小さな翼でよいのだが、鷲は体重5~8kgで翼開長は2~3mにもなるわけだ。

仮に人間が飛ぶ場合には体重50Kgとしても翼開長は10~20mぐらいは必要になるだろう。一人乗りのグライダーが目安と思えばよい。ただし滑空だけだが。

だから天使なんてものはあの羽のサイズでは絶対に飛べないのだ。自力で離陸して舞い上がるためには羽だけではなく、その羽を羽ばたかせる桁外れに強力な筋肉も必要だ。

さらに高高度で長時間飛び続けるのは人間の肺の機能では不可能だ。渡り鳥の肺はクルマのエンジンでいうところの4サイクルになっていて、排気と吸気を同時に行えるようになっている。人間は2サイクルだ。

ペガサスに至っては、体重は400~500kgはあるだろうから、翼長は50mぐらい必要だろう。航空機には内燃機関という強力な動力源があるわけだが、動物には内燃機関のような瞬間的なパワーを生み出す動力源はないのだ。羽ばたくにしろ、滑走するにしろ、現実的には500kgの動物が自力で飛ぶのは不可能であろう。

では翼が無いヘリコプターがなぜ飛べるかということ、ローターを回すことで強引に揚力を捏造しているからだ。あの方法はかなり強引だ。だからヘリはむちゃくちゃ燃費が悪い乗り物でもある。

実際、ヘリ自体が空を飛んで移動するよりも、ヘリをトレーラーに積んで陸送したほうが輸送コストは安いそうだ。

では冒頭のロボたちはどうか？もちろんロボなので強力な動力源は備えているだろう。しかしグレートマジンガーを例にあげれば身長は25mで体重は32tだそうだ。旅客機では翼長50mとして重量（乗客や貨物を含めて）は80~90tぐらいなので、この数字だけを見ればグレートマジンガーも飛べそうなものだが、航空機というものは飛ぶという機能に特化して作られたものだ。外装は極力薄く、軽く、設計されている。小型の飛行機のボディーは人間の力で強く押せば凹むこともある。

しかしグレートマジンガーは戦うことを目的として設計されている。ぺらぺらの外装ではなく、かなり厚みのある超合金でできている。そうすると果たして32tで本当に納まるのか？という疑問も生じるわけだ。ナノテクが実用化してプラスチックよりも軽く超合金より硬い金属を使っているとすれば別だが。

というかそれ以前に身長25mの金属のロボは2足歩行することすら困難なはず。片足を上げた状態で全体重をもう片方の足で支え、バランスをとるだけで精一杯だろう。もちろん敵のロボと格闘するなどというのはほど遠い。一度転んだら自力では起き上がれないだろう。

30cmのプラスチックの定規の先端に消しゴムを乗せて、定規のしなりを利用して消しゴムを飛ばしてみる。3~5mぐらいは飛ぶだろう。ところが1mの定規で同じことをやろうとしても思いのほか飛ばない。定規も1mになると自重で弾性が鈍くなるのだ。

だからアリをそのままの形でゾウの大きさにすると絶対に歩けないのだ。無理に歩こうとすれば6本の細い足はボキボキと音を立てて折れるはず。

という具合にデカイものを動かすのは想像以上に大変なことなのだ。身長2m以上の巨人症の人が転倒して命を落すことがあるのも同じことだ。1.5mと2mでは意外にも大きな差があるのだ。

だから転倒したグレートマジンガーは、恐らくその転倒の時にももの凄いダメージを受けるはずであり、そのダメージに絶え得る設計にすると、より全体を強固に頑丈に作る必要があり、さらに重量が重くなるという悪循環になるわけだ。

鉄人28号に至っては身長10mで体重は100tだそうだ。さすが昔のロボットだ。なんせ鉄でできていて、表面はリベットでとめてるのだから仕方が無い。同時にこのようなメタボな体型ではグレートマジンガー以上に絶対に飛ぶことはできない。

少なくともグレートマジンガーには十分な揚力を得るにはほど遠いものの羽らしきものがあるのだが、鉄人28号はジェットエンジンのみだ。ジェットエンジン（ロケットエンジン）だけでは勢いは出るものの揚力は得られない。

ではなぜ宇宙ロケットが飛ぶかという、あれは1回しか飛ばないことを前提に設計された燃料とエンジンのかたまりなのだ。アポロ計画で使われたサタン5型ロケットは全長85mで重量は2,800tもある。その大半が燃料であり、燃料を使い果たした筐体はブースターもろとも切り離して捨ててしまわなければならない。

ということは仮に鉄人28号にサタン5型並のブースターを搭載すれば大空高く上昇することはできるかもしれない。しかし胴体は大量の燃料が入るタンクとなり両足がブースターになるので、一度上昇したらすぐにガス欠になり、ブースター自体の重量で飛行は維持できなくなり、落下する、又はブースターと空の燃料タンクを切り離さなければならない。

つまり顔と腕だけになってしまうわけだが、この時点で大気圏から脱出して無重力状態になればいいのだが、鉄人28号の場合は昔のロボットなので宇宙に敵はいない。

従って戦うのは大気圏内に限られる。そうすると腕と顔だけの鉄人28号は揚力を維持するための翼がないので落下する以外に道はない。

であれば敵めがけて落下し、ついでに爆薬を内蔵していれば、それなりに敵にダメージを与えることができる。しかしそこまでの正確な位置に、あの真空管が入っているであろうアンティークな「リモコン」で誘導できるのかどうかは疑問でもある。となると、無差別な都市攻撃のような戦術でしか使えないわけだ。そうして開発されたのがV2号だ。



## 発明

---

人類三大発明が何かという議論は尽きない。蒸気機関、紙、活版印刷、羅針盤、火薬、コンピュータ、自転車、言葉、文字、ポケモン、石器、その他色々な説があるようだ。しかし恐らく外せないであろうものが「車輪」ではないか。

人類は多くのことを自然や動物を観察し、その現象や行動をヒントに道具を作ってきた。例えば蒸気機関は間欠泉から吹き出す水蒸気を見て、そのエネルギーを何とか応用できないか？と考えたことであろうし、火薬は硝石、硫黄、炭が自然界で燃焼する様子を観察したところから発した可能性もある。

石器はオラウータンやゴリラが植物の殻を砕くために使っていた石が進化したものだ。紙は元々木の葉を使っていたものが、植物の種類や加工方法を徐々に絞り込んでいった結果完成したものであろう。羅針盤は自然界の中で磁力を帯びた鉄鉱石が何かが元で、それが方位を示すということに気がついたことがきっかけであろう。

自転車や活版印刷、コンピュータは文明がかなり発達してからの発明であり、飛行機やライターも発明と呼んでいいのかもしれない。また、言葉や文字は人類が進化する上でコミュニケーションをとるために必然的に生まれたものである。

しかし車輪の場合には、自然界にヒントとなるもの、参考となるものは存在しない。動物の場合でも、実は足による歩行という移動手段よりも、車輪を利用したほうが、はるかに効率的なはずであるのだが、なんせ、生物なのでその車輪に栄養を伝達しなければならず、その方法が無いために生物には車輪が存在しないわけだ。

また、発明の中で何が重要であるかを判断する基準としては、代替品があるかどうか？ということが挙げられる。例えば蒸気機関の代替品は、電気、内燃機関、など既に色々なものが存在する。紙については既にペーパーレス時代になりつつあるし、プラスチックや繊維でも代替できなくはないだろう。

活版印刷の代替はコピーやレーザーなどいくらでもあるだろう。羅針盤はGPS、火薬の代替品としても既に様々な爆発物が存在する。

そういう意味では車輪に代替できるものは存在しない。あえて言うならば「そり」や「コロ」、「動く足」ということになるだろうが、どれもその効率やコストパフォーマンスは車輪の比ではないだろう。キャタピラというものもあるが、これは車輪の応用例でもあり代替とは言えないだろう。

もし車輪が発明されていなければ、モーターや内燃機関、発電や原子力、鉄道や飛行機、自転車や馬車、洗濯機も掃除機も冷蔵庫もエアコンも存在しえなかったわけだ。

そして忘れてはならない発明がもう一つある。それが「階段」である。階段に代替できるものをあえて言うならば「坂」「梯子」「滑り棒」ということになるだろうが、どれもその効率やコストパフォーマンスは階段の比ではないだろう。エスカレーターというものもあるが、これは階段の応用例でもあり代替とは言えないだろう。

もし階段が発明されていなければ、2階、3階に移動するためには、人間が歩いて滑り落ちない程度の、恐らく傾斜10度以下の坂によって建坪の大半を占めてしまうことだろう。エレベーターが装備できる高層な建築物を除いて、多くの建築物がこの坂が必要になってしまったことだろう。

## ロードローラー

---

ロードローラーを最初に作った人はその設計段階で重大な問題にぶち当たった。

「スペアタイヤを載せる場所がない。」ということである。  
しかも2種類必要だ。

そこでその設計者は考えた末、画期的な解決方法を思いついた。

それは「絶対にパンクしないタイヤにしてしまう。」ことであった。

## 歯

---

虫歯になると歯が痛くなる。その原因は歯というそもそも他の肉体の部分とは材質の異なるパーツに無理に神経などというものが入っているからだ。

歯に神経があるならば髪の毛にも神経があるべきではないのか。もし髪の毛に神経があるとするとな人は一生髪の毛を切るなどということはせず、その1本の髪の毛が寿命となり神経も死に絶え自然に抜け落ちるまで待たなければならない。

そうなるとおそらく現在の神経の無い髪の毛のように急速に伸びるということもなくなるだろう。ということは歯に神経が無ければ現在の神経の無い髪の毛のように自由にカットしたり染色したり加工することができ、放っておくとどんどん伸び、抜いてしまったとしても鮫のように後からいくらでもはえてくるものになっていたはず。進化の途中で突然変異で歯に神経が入ってしまったと考えるのが自然だ。

事実現在の神経のある歯でも全てが抜け落ちてしまうと、自然と歯茎の部分が隆起して固くなってくる。だから高齢になって入れ歯を着用するよりも、若いうちに永久歯を全部抜いてしまい、少しの間の不自由は我慢して歯茎を鍛練すれば、自然に隆起して固くなった歯茎の肉が剥げ、顎の骨が露出し歯の代わりとして機能するようになる。

これは屈強の1枚歯なので、それまでのばらばらに別れた隙間のあるとうもろこしのような不安定な歯とは比べ物にならないほど頑丈であるし虫歯にもなりづらい。

しかし現実として歯に神経があるのだから仕方がない。このままじっと次の突然変異によって歯の神経がなくなるのを待つしかない。

それまでの間は、とにかく痛い虫歯にならないように、普段からしっかりと歯クソで歯をガードしておくことが大切。

# 脱

---

「脱」のつく単語は色々である。

脱獄：獄中からシャバに逃げ出す行為を言う。獄中とは刑務所やブタ箱のことであり地獄ではない。地獄から脱獄する場合は生き返ることになる。また病院や学校、寮などからシャバに逃げ出す場合に使われることもある。

脱走：脱獄する途中で走るのが脱走だ。大脱走は大勢で脱走すること。少人数で脱走する小脱走のほうが見つかりにくい。脱走は人間以外のものに対しても使われる。ザルから豆が脱走する、というような場合だ。しかしこれは豆が意志を持って脱走したのではなく、ザルに豆を入れて洗っていた人間の不注意によってこぼれ落ちた事態を豆のせいにしてしようとする人間の一方的な責任転換である。

脱出：元いた場所が爆発炎上したりして、そのままいると死んでしまうような所から逃げ出す場合によく使われる。しかし教室から脱出する、というように生命には関係ない場合にも使われる。脱走だと罪悪感があるのだが、脱出だと授業や教師に問題があるような印象を与えられるからだ。

脱帽：まいった、とか、恐れ入ったと思ったときに使うのであるが、多くの場合帽子をかぶっていないのにこの言葉を使う。

脱毛：脱帽したときに帽子の内側に毛がくっつき抜けてしまった場合だ。フタの内側にくっついた崎陽軒の「減るシュウマイ」のようなものだ。

脱線：列車の車輪が線路から外れてしまうこと。走行中に脱線すると車輪は枕木の上をガタガタと通過するのでひどく乗り心地が悪くなるので運転手も乗客もすぐに脱線したことに気づくのではあるが、話が脱線した場合には気がつかないこともある。

脱輪：列車は脱線するが、クルマは脱輪する。脱輪した場所がU字溝と崖の場合では緊迫感が大きく異なる。

脱稿：脱稿したと思っても、多くの場合推敲が必要になる。

脱肛：脱肛したと思ったら、多くの場合治療が必要になる。

脱腸：脱肛と似たような物だが病名としては脱肛より恥ずかしい。

脱字：書こうと思っていたにもかかわらず書き忘れてしまった文字のこと。誤字は発見されやすいが脱字は発見されずに単に国語力が低いと思われるので気をつけよう。

脱サラ：解雇されたときに使う言葉。

脱力感：仕事をしたくない時に使う言葉。

脱落：先頭集団から脱落すると言うが、先頭集団が相対的に速いだけであって、本当に脱落したわけではない。

脱脂綿：本当に脱してほしいのは脂よりもウイルスや細菌であるのだが、これらを完全に排除する自信がないので脂を抜いただけで医療用とするのはいかなものだろうか。

脱脂粉乳：牛乳から乳脂肪分を取り除いてしまった粉なので栄養価は低い。しかしただの粉に比べると栄養価は相当に高いそうだ。

脱兎：脱兎のごとく速く走るクルマがダットサンだそうだ。

脱皮：痩せ細ったお母さんとかから生まれた肥満児を見ると、出産ではなく脱皮だったのではないかと思うこともある。

脱水：二槽式洗濯機の片側が脱水槽だ。中身が少ないと内側の壁にひっついてバランスが崩れたまま狂ったように本体内側に激突しながら回り続ける。

脱税：見つかるまではあまり使われない言葉。

脱臭剤：そのものがけっこう臭いのもある。

脱糞：普通に糞をするのと違うところは出る時の勢いだ。

脱字：誤字とセットで使われることが多いが大抵は誤字である。

脱衣：更衣は着替えること。脱衣は脱ぐこと。しかし脱衣場で一度脱いだ服を着ることもある。

脱臼：骨の関節が外れること。肋骨や頭蓋骨は滅多のことでは脱臼しない。

脱北者：北海道や北陸から脱出したときには使わない。

脱糞：便が柔らかいときに使うのは適さない。

脱着：骨の関節を取り付けたり、取り外したりできること。頭蓋骨を脱着するのは難しい。

人類がくりを食うようになったのは意外と最近の事であるという説がある。

この説によると最初にくりを発見した人間がイガからその中味を取り出そうとしたところ、イガのトゲが何本も手に刺さってしまい、どうしたらいいものかと考え、手より皮膚の固い足ならば大丈夫なのではと思い、両足でイガの割れている部分を踏み押さえてその中味を取り出そうとしたところ、イガのトゲが何本も何本も足に刺さってしまい、どうしたらいいものかと考え、足にワラを何重にも巻つけた上で、その足でイガの割れている部分を踏み押さえてその中味を取り出そうとしたところ、イガは無情にもワラを貫通し、イガのトゲが何十本も足に刺さってしまい、大変痛い思いをした。

どうしたらいいものかと考えた末、次の事に気付いた。イガを押さえている部分と、足の部分を離してしまえば良いのだ。

今度はワラを円形に編み上げ、その中央に足を乗せ、へりの部分でイガをこじ開けようとしたのだが、足の力がワラのへりまでは伝わらず、イガがワラに刺さってくっつくだけで、くりの中味を取り出すには至らなかった。

やはりワラではダメであると思い、今度は木の長い板を足にくくり付け、ちょっとこわいので板は長めにして、その板の先端でくりのイガをこじ開けようとした。しかしこの板を付けていると歩きにくいので先端を曲げたりもしてみたらしい。

こんな事をやっているうちに秋が終わり冬になり、雪の積もった日にこの円形のワラと木の板を足に付けてみたところ、以外に都合の良いことを発見し、これが後の、かんじきとスキーになったと言われている。



# UFO

---

「あなたはUFOを信じますか？」という質問をするやつがいる。バカではないのか。UFOとは"unidentified flying object"つまり未確認飛行物体であり、確認をしていない物、つまり何だかわからないものを信じるとか信じないかの前に何であるか確認する必要がある。

他の惑星から宇宙人が乗った謎の円盤である可能性は極めて低く、大抵のUFOは気球であったり、隕石であったり、凧であったり、宙高く舞い上がった洗濯ものやゴミ袋である。そのゴミ袋を信用できるか、あんなに舞い上がるなんて信じられないのか..ということでありこれは甚だバカバカしい。

それではなぜ宇宙人の乗った飛行物体が未確認飛行物体なのか？それは宇宙人が乗っていることが一度も確認されていないからである。UFOと騒がれはじめて50年は経つと思われるが一度も確認されていないというのは情けない話である。

寝ている間にUFOに連れ込まれて身体検査をされたとか、宇宙人とテレパシーで交信したとか、いろんなことをいうやつがいるが、確認したという確固たる証拠は何も残していない。

UFOに連れ込まれたならば、ちょっと交渉してテレビ局まで同行してもらいマスコミ関係者を集めて記者会見を開き、「私が宇宙人です」と証言してもらえば、多くの人を確認したこととなり、それ以降はその宇宙人が乗っていたUFOはUFOではなく、"confirmed flying object"つまり確認済み飛行物体、CFOとなる。

しかしながら今日のように特殊メイクや画像の合成技術が進歩すると当の宇宙人も「私が宇宙人です」と言っただけでは信じてもらえないのである。

「ほら、私は宇宙人だから銀色の服をきています。」と言ったところで「消防所のオッサンと同じじゃないか！」「それに瞳孔だってこんなに小さいですよ。」「コンタクトじゃねーのか？」「超能力でコップを浮かすことができます。」「ユリゲラーか？」「それにほら、ここに大型2種のUFOの免許証があります。」「だいたい宇宙人のくせに何で日本語喋ってるんだよ？」なかなか信じてもらえない。

お互いに信じ合うことができない限り宇宙に平和が訪れる日は遠い。

## ペットフード

---

スーパーに行ったらキャットフードが売っていた。その箱には育ちの良さそうな猫の写真が印刷してある。

ドックフードも売っていた。その箱にも犬の写真や犬のイラストが印刷してある。

家で飼っている虎と象とゴリラにペットフードを買って帰ることにした。

虎と象とゴリラの絵の印刷してある箱を買い、家に帰ってよく見てみると、これらはどうも人間の食べ物らしかった。

牛乳をかけて食うらしい。

## 水没

---

「ということで、誠に残念ではありますが、この堀田手村は出鱈目川第3ダム建設のため水没することになりました。村民の皆様方におかれましては、先祖代々長年に渡り生活を営まれてきましたこの地において、さぞかし無念の念の念であることとは思いますが、これも日本の発展のため、ひいては我が堀田手村の存続と私の私的利益、あ、いや、村民の皆様のため、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、是非ともこの度の国の判断を受入れ、移住していただくようお願い申し上げます。尚、移転費用につきましては、全て国の補助金によるものでありまして、うち5%が私個人の、あ、いや、ではなくて、つまり5%は消費税であります。ので、ご理解のほど、よろしくようお願い申し上げます。」

と村長の説明が終わると同時に村の集会場には罵声が飛び交った。

「聞いてねえぞ！」「知らんねんぞ！何だと思ってる！」「裏切り者！」「貴様それでも村長かあ！」そしてこれらの罵声がおさまるのを待って、恐る恐る司会者が会場にマイクを向けた。

「はい。今の村長の説明に対して質問のある方はどうぞ。。」しかし会場は「し〜ん。」そして司会者。

「えーと、特に質問がないようでしたら、これにて堀田手村出鱈目川第3ダム建設における水没に関する公聴会を終わりにしたいと思います。」

と言ったと同時にまた罵声が。「勝手に終わらせんじゃねーぞ！」「村民の意見を無視するのか！」「ワシらの生活はどうなるんじゃ！」と会場が殺気に包まれる。

そして司会者。「はい。あの、意見のある方は挙手をお願いします。」と、会場に向かって喋る。すると会場、誰も手を挙げずに、「し〜ん。」「では意見、質問等無いようですので、これにてこれにて堀田手村出鱈目川第3ダム建設における...」

と言ったところで、「オラが牛はどうなる！」「うちのおっかあは寝たきりだぞ！」「今年の収穫は誰が収穫するんだ！」と野次の嵐に包まれる。

そして司会者。「えーと、意見や質問は一人ずつお願いします。勝手に怒鳴らないでください。マイクを持って行きますから、一人ずつ質問してください。質問のある方は手を挙げてください！」すると会場、「し〜ん。」と水を打つ。

しばらくして会場の片隅でこそこそと話し声。「おい、元さん。何か言えよ。」と熊さん。「やだよ。恥ずかしい。それより熊さん。あんた言いなよ。」と元さん。「だってあんたダム建設反対のデモとか出てたでねえんか?」「おお、出てたとも!」「じゃ、反対してんだから何か言えよ。」「でもなあ。。」「どした?」「建設推進のデモにも出てたんだ。」「お。そりゃ何でえ?」「いやあ、亀蔵さんに出ろって言われたからなあ。」「んじゃしょーがねえなあ。」「だろう。」と話しているうちに段々と声が大きくなってしまい、気がつけば会場全体がこの二人の会話に聞き入っていた。

そこで司会者。「えーと、そちらの方は、建設反対と建設賛成の両方の運動に参加されていたんですか?」と、これを聞いた熊さん。顔を真っ赤にして。「あ、いやあー。亀蔵さんに言われちゃあ、しょーがなかんべえ。」

とこれを聞いた司会者。村長の顔色をうかがう。しかし村長はこれを無視。ハナクソをほじりながら窓の外を見ている。そこで会場の中の一人が手を挙げる。司会者はその人に向かって言う。

「はい。では今マイクを持っていきますので、お願いします。」村役場の若手職員がマイクを持ってかがみながら走る。

「えっと、亀蔵です。いまあ、亀蔵さんに言われたとかあ、何とか言ってみましたがあ、わしは村長に言われた通りに言っただけでえ、命令とかお願いとかはしてないですウ。お金は少しだけえ、えっと2万円ばかり渡しましたがあ、それでも無理にお願いはしてねえです。」

それを聞いた村長。役場の若手職員を手招きしてマイクを持ってくるよう合図を送る。そしてマイクが来るとそれを奪い取ってちょっと興奮気味に、「亀蔵さん。みんなが居る前で言っただけでえ、悪いことがあるということも分かってもらわないと困る。お金がどうしたとか、町の料亭でごちそうになったとか、その後コナパニオン呼んだとか、そりゃ確かに全部補助金から使ってるわけだが、そんなこと、こういう場所で言ったらだめだ!」と言って無造作にマイクを職員に返す。

これを聞いた元さん。「あの後コナパニオン呼んだんかあ?」すると熊さん。「村長と亀蔵さんは、町の人と一緒にキャバクラさ行っただ。」それを聞いた熊さん。「そりゃオラも行きかけたなあ。」「そりゃ無理だ。」「何でだア?」「その顔じゃ無理だあ。」「メスの熊も寄り付かぬエ。」と、この時点でまた声が大きくなっていて会場全体に聞こえていた。

「そんじゃ、水没した後、メスの河童も寄り付かぬんじゃ?」「ありゃ、今はオッカアも寄り付いてねえらしいぞ」「そんじゃキャバクラ行くしかねえべ。」「だからキャバクラ行っても誰も寄り付かんから行ってもしょうがねえべ。」「そんじゃ水没した後、竜宮城でも作んべえ。」

」「あ、そりゃグッドアイデアだ！」「タイやヒラメなら寄り付くべえ。」「お、そういやあ料亭でタイやヒラメ喰っちまったあ。」「カメは喰ってねえだろうなあ？」「おい！誰か酒持って来い！」「タイやヒラメもな。」「乙姫はおらんかあ？」「熊さんのオッカアはダメだぞ！」「そりゃまだメスの河童のほうがマシだ！」「メスの河童が書いてある酒あったよな？」「お。ありゃ熊さんのオッカアだったんかあ？」

そうして宴会が始まり、村人一人一人が順番にカラオケを歌い、元さんも熊さんも亀蔵さんも村長も、いつもの宴会と同じように盛り上がり、誰一人反対することもなく、無事に堀田手村は出鱈目川第3ダム建設のため水没することになった。

## 色

---

60色セットの色鉛筆は見た目もゴージャスでカラフル。60色もあれば世に存在する全ての色が網羅され忠実に再現することができると思っている人も少なくない。小学校低学年や幼稚園の児童の多くはだいたいそのように思っているし大人でも漠然とそんなふうに思っていたりもする。しかし実際には太陽光の中の40nm~70nmの波長の電磁波が物体に反射する特定の領域の波長が個々の色となって目に映ってくるわけで、その範囲はリニアに連なっているために色の数は無限ということになる。

この40nm~70nmの範囲の波長は可視光線と呼ばれ、基本的に人間の目で認識できる色の範囲である。そして70nm~100nmの波長が赤外線、10nm~40nmが紫外線であり、いずれも人間の目には見えない。しかし色々な動物実験によって生物の種類によってはこの赤外線や紫外線を視覚的に感知しているということも最近になって分かってきた。

赤外線や紫外線を視覚的に感知できるということは「見える」ということになる。いったいどんな色をしているのだろうか？残念ながら見えない限りは、先天的に全盲の人が「見える」ということをイメージできないのと同様、その色を説明することはできない。

ただし人間にもこの可視光線の範囲には個体差があり、人によって可視光線の範囲が多少は異なる。中には赤外線を見ることが出来る人も存在し、そのような人は赤外線コタツが赤っぽく見えるそうだ。紫外線が見える人には泳げない人が多い。夏場の海やプールでは降り注ぐ紫外線で眩しくて目を開いていられないそうだ。もっとも最近では室内プールが普及しているためにこのような問題は少なくなった。

色というのは物体そのものに最初から存在しているものではなく、可視光線のどの範囲の波長を反射するかによって人間の目に見えるものである。従ってこの世に存在する全ての物体には色はついていないということになる。

60色の色鉛筆も実態は60段階のモノトーンでしかありえない。ではなぜ物体によってその反射する可視光線の範囲が異なるかというと、それは厳密に言えばその物体を形成する表面の分子構造にある。分子の構造と形状によって特定の波長を反射し、それ以外の波長は吸収するということになる。白は全ての可視光線域の波長を反射し、黒は全て吸収するということだ。従って黒い物体の中には既に吸収されたあらゆる色が詰まっているということになる。

この黒い物体を粉碎することで中に詰まっていた全ての色の光が外に放出されるのだが、それはもちろん光の速さで放出されるわけで、人間の目ではその瞬間を見ることはできない。

ゴキブリの視野で冒険するゲームがあるが、ハエのほうがおもしろいと思う。もし自分がハエであった場合、床から天井までの高さは約300mになる。その天井に逆さにとまるのである。

特に掴まるような物はない。手と足のヒラに何かのりみたいなものがあらかじめ塗ってあって、その接着力だけでくっつくのである。下をみれば300mだ。壁にもとまる。頭を下にしてである。

クモの巣とかがある。直径1cmの表面がベトベトのロープでできたネットだ。直径が1cmもあれば、すぐに気が付くので大丈夫などと思っはいけない。

なんせあなたは時速約100kmで飛んでいるのだ。見つけた時にはもう遅い。体長約4mの、頭の大きさが牛の3倍くらいのクモに食べられてしまうのだ。

物心がついた時は実はハエではない。ウジである。

問題は生まれた場所にある。多くの場合大便の中であり、この確率が最も高い。からだの周り全てが大便である。ものすごく臭い。

臭いだけならまだ良い。あなたの親がなぜあなたをそんなところに生み落としたのかを考えなければいけない。栄養があるからだ。大便を喰うのだ。

大便でない場所の場合もある。犬の死骸のドブに浮いたやつだ。諦めきれない臭さである。腹をこわす心配などしている暇もなく喰うのだ。

きれいな所で物心がつく可能性もないことはない。人工的に養殖している場合である。しかしなぜウジなどを養殖するかというと、サシにするためである。

そろそろサナギにでもなろうかと思っているところに、人間という体長約170mの怪物につまみ上げられ、直径約10cmのJ字型の金属の錨のようなものが近ずいてきて、そのJの先端があなたのケツの穴から頭のテッペンに突き通されるのだ。ものすごく痛い。

そのまま水の中に放り込まれ、体長約30mの巨大魚に喰われるのを待つのだ。

## 味覚

---

指の先に目があったら色々便利な事があるであろう。

しかし目という比較的センシティブな感覚器官は恐らく脳に近い位置になければいけないように思う。SCSIケーブルの長さが6m以内とされているようなものだ。

臭覚はどうだろうか。それほど高感度ではなさそうな器官だ。

それでは何処にあったら便利か。

脇の下や足の裏は避けたい。

味覚に至ってはもっと避けたい場所が多い。

胃の中では一日中ゲロの味がする。

肛門にあったらもっとつらい。

とは言うものの、喰ったことがないので、どの程度つらいかはわからない。

意外にコウバシイかもしれない。



## 焼く

---

魚を焼けば焼き魚、とうもろこしを焼けばやきもろこし、うどんを焼けばやきうどん、ソバを焼いてもヤキソバにならないのはなぜだろう。

やったことはないが、きっとヤキソバとは違うものになるだろう。あんがいうまいかもしれない。こいつがけっこううまくて一般に普及したときの名前が困る。そばやき、とでもするのだろうか。心配である。

炭焼きというのがある。炭で焼いた料理をいう場合と、炭焼き小屋で炭焼きをする場合とがある。後者は少しへんな気がする。炭を焼いたら灰になるからだ。

焼きものというのがあるが、"もの"というのはいささか抽象的過ぎないか。

野焼きというのがある。これは野に火を付けて焼いてしまうことで、翌年の草の生育を促進させるためものらしい。

オーストラリアでは栄養失調や病気のため、まともな羊毛がとれなくなってしまった羊のからだにテレピン油をかけて火を付けて焼いてしまう。使えない羊毛を焼き払い、同時に消毒と皮膚を刺激して質の良い羊毛を育てるためだ。

これを、毛焼きというが、羊が死んでしまうため、今まで一度もやったことがないらしい。

## 足

---

足はなぜ臭いのか？それは足が先端だからである。先端だから冷えないように靴下をはいたりする。先端だから断面部が直接地面に接するため靴をはかねばならない。色々と覆うので蒸れる。蒸れるから臭くなるのだ。

従って臭くなるのを防ぐためには左右の足のヒラをピッタリとくっつけ、そのまま接着してしまえばよい。輪足にして先端をなくしてしまうのだ。これならば臭くならない。

ただしズボンやパンツははけなくなる。はくといえはスカートかフンドシに限られる。

どうやって歩くかといえば輪足の弾性を利用してビヨ〜ンビヨ〜ンと跳ねながら進む以外にない。陸上競技はのきなみ記録が落ちるしサッカーは待てど暮らせど点が入らない。指相撲以外のほとんどのスポーツがその滑稽さで観客を笑わせる興行に成り下がり、ウィンタースポーツは全滅である。

クルマの運転方法も根本的に変更しなければならないし、長時間立っていることができるかどうか問題である。しかも一度転んだら起き上がるのが一苦勞であり、朝起きるのもただ事ではない。階段を上るのはもっとツライし降りるときも失敗は許されない。梯子を上るのは神業である。

しかし悪い事ばかりではない。捕虜や人質が逃げないようにするには地面に打ち込んだ長い棒に輪足を通して放ってけばよいのである。

すぐにどっかに行ってしまう子供や徘徊するボケ老人も輪足に鎖を通してどこかに繋いでおけばよい。

輪足が貫通し合ったシャム双生児が生まれることもある。世の中がかなり殺伐としてくる。暗い時代になってしまう。足が臭いのは我慢しよう。

## 信号とハゲ

---

信号とハゲになにか関連があるかというところと全くない。信号は信号、ハゲはハゲである。ではこの2つに何らかの共通点があるのかと言え、それがあからこのページのタイトルになっているわけだ。では信号とハゲのどこが共通なのかと言え、それは日本に来た外人がぶったまげることベスト2であるということ。

まず信号。何にぶったまげるかと言え、信号を「守る」ということ。もちろん交通量の多い道路や列車や自動車は外国でも信号は守る。当たり前の話だ。守らなければ命にかかわる。しかし明らかに交通量の少ない、または全くクルマの走っていない交差点や横断歩道での歩行者用信号は、赤でも100%大丈夫だろ！ということもよくある。それでも青に変わるまで律儀に待ち続けるという行動に対してぶったまげるのだ。

これは洋の東西や人種や国家を問わず、日本人だけであるらしい。

次にハゲ。外人にももちろんハゲている人はいる。日本人にはハゲが特別多いということでもないのだが、何に対してぶったまげるかと言え、あのバーコード1:9分けの頭である。電車の中などでは背の高い外人は、その頭を眼下直前に見下ろすことになる。そして、なぜこのようなことをするのか理解できないらしい。毛が無いのは無いで仕方が無いことだし、いくら1:9分けにしたところで、そのバーコードの下には毛が無いのは一目瞭然なはず。

サムライはあえててっぺんの毛を剃ってチョンマゲを結ってたわけなので、このバーコード1:9分けの頭は古来からの何らかの文化の伝承なのかなと思うらしいのだ。そして特にそういったものでは無いと分かったときに、今度は無性にコミカルなものに見えてくるらしい。何でこんなことをするのか？ということとは全く理解できないのだ。

ついでにもう一つ。カツラだ。カツラはよほど高級なものではない限り、それがカツラであることはバレバレだ。自毛だとすればいい歳して前髪を垂らし生え際を隠すということはほとんど無い。生え際を毛で隠していること自体が「私はカツラです」と言ってるようなものだ。それに毛の色や艶が自毛の部分とは明らかに違っていたりもする。それにカツラの毛は伸びない。いつも同じ毛の長さである。

そしてカツラ、イコール毛が無いということ申告しているということにもなる。そして毛が無いことをなぜ隠す必要があるのか？ということとは外人には理解し難いということでもある。毛が無いのであれば無いなりの見せ方というものがあるだろうに。残り少なくなった僅かな毛にいつまでも未練を持って執拗にこだわるから可笑しいことになるのだろう。